

第三十回和辻哲郎文化賞 一般部門受賞作

保阪 正康著『ナショナリズムの昭和』

(2016年11月25日 幻戯書房刊)

**保阪正康** ほさか・まさやす ノンフィクション作家・評論家

1939年(昭和14年)12月14日生まれ。78歳。埼玉県東松山市出身。

日本近現代史

1963年(昭和38年)3月、同志社大学文学部社会学科卒業。1966年(昭和41年)3月、電通PRセンター退職。1971年(昭和46年)12月、朝日ソノラマ編集部退職。1972年(昭和47年)1月著述業に入る(至現在)。1995年(平成7年)4月、函館大学客員教授(～1999年3月)。1998年(平成10年)1月、個人誌『保阪正康責任編集 昭和史講座』発刊(～2016年第16号(2018年現在休刊中))。1998年(平成10年)4月、国際日本文化研究センター柴山哲也班「日本の情報化とジャーナリズム機能の変容」共同研究員(～2000年3月)。2003年(平成15年)4月、立教大学社会学部兼任講師(～2011年3月)。

主著に『死なう団事件 軍国主義下の狂信と弾圧』(1972年 れんが書房、のち角川文庫)、『五・一五事件 橋孝三郎と愛郷塾の奇跡』(1974年 草思社、のち中公文庫)、『破綻 陸軍省軍務局と日米開戦』(1980年 講談社、のち講談社文庫)『東條英機と天皇の時代 上下』(1981年 伝統と現代社、のちちくま文庫)、『昭和陸軍の研究 上下』(1999年 朝日新聞社、のち朝日文庫)『秩父宮』(1999年 文藝春秋、のち中公文庫)、『「特攻」と日本人』(2005年 講談社現代新書)、『崩御と即位 宮中で何が起こっていたのか』(2009年 新潮社、のち新潮文庫)、『昭和史のかたち』(2015年 岩波新書)他多数。

## 受賞のことば

一九六〇年代初めの頃である。京都で大学生活を送っていた私のもとに、故郷(札幌)の大学に通う友人が、和辻哲郎先生の『古寺巡礼』を持って奈良を歩こうと不意に訪ねてきたことがある。私はうなずいてこの書を手に一週間ほどの間だったが、二人で大和路を歩きまわった。私たちの世代は大体が青年時代に思想上の、あるいは人生の壁にぶつかる。この友人も思想上の葛藤を続けていたが、和辻先生の書にふれて、もういちど自らをふり返りたいと札幌からやって来たのである。私自身は京都で寺社の空間に身を置いているうちに、先達の残した文化に打たれ、私たちの世代はこうした文化の香りを人格陶冶に用いるべきだと実感するようになっていた。昭和ナショナリズムの歪みは驚くほど先達の文化や思想、倫理に背反している。庶民の共同体での素朴な情念は押さえられ、歪みは拡大していった。私はそのことを訴えたかったのである。

## 《選考委員評》

山折 哲雄

ナショナリズムとは、思想史上の一種妖怪じみた難物であるが、これをこの国の昭和時代に見定めて、そこににじみでる特質を執拗にえぐりだした労作である。昭和を前期ファシズム期と後期戦後占領期に分け、新しい枠組の下に構造的に明らかにしていく。前期は二・二六事件、すなわち個性的な人物たちの言動をめぐる昭和維新期の分析であることはいうまでもない。それにたいし後期の占領期は米国の強大な圧力の下に日米の政治指導者たちがいかに振舞ったか、新しく公表された資料を駆使してその複雑な過程を明らかにしていく。

一口でいえば戦前期のナショナリズムは、軍事体制下の「臣民」意識を広めることで民衆の共同体的な慣習や価値観を抑圧・回収していったのにたいし、後期のそれは、米国によって導入された民主主義体制下の天皇権威に、大衆の草の根ナショナリズムをいかにソフトランディングさせるか、その緊張と葛藤にみちた時代だった。前期の分析に費やされた分量はおよそ三〇〇頁で本書の後半におかれ、それにたいして戦後占領期は二〇〇頁強で本書の前半にすえられ、ぜんぶで七〇〇頁をこえる大著になっている。

長い年月にわたって『諸君！』（文藝春秋社）に連載された文章を増補改訂し、日本ファシズムの波瀾に富んだ盛衰史を過不足なく叙述している点は敬服に値するが、なかでとりわけ際立つ圧巻は、占領期における昭和天皇と連合軍最高司令官マッカーサー元帥、そして日本国首相吉田茂（臣茂）の政治指導者たち三者による、きわどい外交折衝と大胆な政治行動をそれぞれ鋭く浮き彫りにしていく叙述の面白さだった。昭和天皇が吉田首相と二人三脚を組みながら、マッカーサーの政治力を視野に巧みな政治判断で自己の主張をつらぬいていたあたりの分析には教えられるところが多かった。不満をのべれば、昭和ナショナリズムの深層を追求する上では欠かすことのできない柳田國男の民俗学の成果と、もう一つ農本主義の系譜への言及が手薄だったことが惜しまれる。

阿刀田 高

ここ十数年、精力的に昭和史の深層に筆を尽されている保阪正康氏の集大成とも称したい一冊である。今後の一層の研鑽も予測され、それ故に集大成は適切な表現ではないのかもしれないが、周回の労作への感銘は深い。

まずナショナリズムを上部構造と下部構造とに分け、前者は“国家主義、民族主義、あるいは国粹主義といった訳語、にふさわしいものとして捉え、その価値観は“国益の守護、国権の伸長、国威の発揚に集約されるもの、としている。これに対して後者は“共同体で受け継がれている日本人の日

常生活の規範、倫理観、さらには郷土を愛する心や思想、先祖を敬う精神など、私たちが抱くこの国の自然、風土、信仰など”で捉えるものとしている。

ひとことでナショナリズムと呼ばれているものを二つに分けることにより、昭和史の中で前者がこの国を圧倒的に支配して後者をどのようにないがしろにしたか、そのプロセスをわかりやすく詳細に解明しようという試みと見てよいだろう。

入念な分析であるが、従来の資料に加え、2014年に公開された『昭和天皇実録』の解説がみずみずしい。学術的な記述とはべつに天皇の詠じた和歌なども引用され、

—ああ、これが天皇の思案であり、心情の吐露であったのか—

と、もちろん不十分ではあるが、昭和史の重要人物のありようを知るうえで興味深かった。

ぼう大な研究であり、いくつもの示唆があり、結語も一通りではないが、第51章の末尾に記された“国を愛することにおいて国家を個人より上位に置く論は、その国のナショナリズムを根本から崩壊させる”は、今日このごろの世相に警鐘を鳴らすものとして尊い。今年もまた和辻哲郎文化賞にふさわしい良書を得た、と喜ぶたい。